

① 教区改編によって、一人の門徒の誕生はあるのか？

教化活動と行政事務の分離が必要です。

（新教区の円滑な運営と、教化活動の空洞化を引きおこさないために

～教化活動の場を「改編された組」のみとせず、必要なエリアでの事業の取り組み）

我が教団の宗祖親鸞聖人は、当時幕府・朝廷の支配の及ぶ北辺の鄙の地であった北関東の開拓地、関東ローム層の火山灰地で苦闘する農民達と共に、念仏を光として、厳しい生活を切り拓いていかれました。地震・津波・疫病・冷害・飢饉と、次々と襲いかかってくる困難に向き合い、生き抜く中で、文字をも知らぬ、田舎の人々と、御同朋・御同行の全く新しい水平の人間関係の集団を、実現していきました。

その宗祖親鸞聖人の生誕 850 年立教開宗 800 年を迎えようとしている現在、全国の三地域で「新教区発足に向けて」準備の努力が、関係者各位によって、鋭意積み重ねられています。それについて深甚の敬意を表します。

ところが、その活動が、今様々な困難な状況に遭遇しています。新教区への移行時期 2 年間をはじめ、初期における現 5 教区間の教区費の格差等、財政問題の不均衡、教区負担の増加の問題等の諸問題を抱えたままの移行となります。

そこでお尋ねしたいことがあります。まずその第一は、新教区への財政支援の規模と項目及びその期間をお示してください。

元より浄土真宗においては、教えは、日常生活の場で、生きる日々の現実の中で試され、わが身に受け取られてきました。その意味で、毎月のお参りの家庭での会話。地域、寺での聞法会をはじめ、様々な活動を通して「地域の聞法道場としての寺の存在意義」は、浄土真宗の教えに則って活動が形作られてきたと考えます。このような事を踏まえるならば、「寺院活性化を支援」し、

組を中心とした「集まる教化活動」に力点を置くことは、理に適った方向性であると考えます。

ところが、改編されることで、門徒数一万戸余りの組が生まれ、そこでは様々な活動が人的、財的にも十分に果たされます。一方、存続そのものが危ぶまれる組もあり、大きな組間の格差が生じることとなりました。

組改編については、新教区で解決すべき問題ではありますが、当局には、改編が改悪とならないように、丁寧なご指導をなされることを求めます。

これまで門徒戸数の少ない組や、寺院数の少ない組は「現教区」の事業に参加する事で、善き人に出会えたり、活動の様子や経験を交流する事ができました。また、今まででも「現教区」坊守会事業には、組内坊守会が活発な組からの参加者は少なく、代表参加的な参加でしたが、組の規模が小さく坊守会が活動が困難な人達が、現教区坊守会へ参加し、悩みを相談、経験の交流ができ、エネルギーを貰って、各組各寺での日々を深めています。女性差別の現実が、存在する日常の生活を踏まえて、婦人会や坊守会など、女性の活動の場の保障を如何にするかは、当事者からの意見の聞き取りと、十分な配慮が必要と考えます。また、高齢者中心の、門徒会や同朋の会推進員の活動の場の保障についても、同様の配慮が不可欠だと考えます。そのためにも、エリア事業の存続の必要性を感じています。

新教区教化体制の各機関の人員構成については、「各エリアから・・・名」とあり、現教区廃止、2年間の過渡的措置を経て「基本的に組織は設置せず・・・**「組」複数「組」**による教化事業を実施する」となっています。

現在は現教区での教化活動や会議等を通して、交流する事で人となりに出会うことが出来ています。ところが、2022年以後、時間を経るにしたがって、近隣の**「組」**の人と取り組みは、知りえても、エリア全体を網羅する、その識見・知見を持ちえず、何をもって「エリアの代表・エリアから選ばれた」とするのか「エリアから誰を代表とするのか」という問題に、誰もが突き当たるであらう

うと考えます。僧侶・坊守はもちろんですが、特に任期が短い門徒会・同朋の会推進員、婦人会の方々はとてもお困りになると考えます。

九州教区全体での教化事業・会議への参加は、参加できる条件を持っている人が極めて限定的固定的になることが予想されます。ある程度のエリア教化事業・運営機能を残存し、九州教区教化本部での教化事業・会議参加者数を減ずる方策等を検討するべきだと思います。

聞き及ぶところでは、東北の「奥羽・山形・仙台教区」では「必要なエリア事業は行う。新教化委員会の中にエリア事業を担当する部署を設置する」事が合意の前提として確認されているとの事です。それはまた、「**教区の改編が教化の衰退一教団の解体**」とならぬ為には、必然的方針だと考えます。

新教区準備委員会には、エリアに関わるこれらの懸念に十分な配慮と手当てがなされるように、当局からのご指導を期待しますが如何でしょうか。

私達の教団で最も配慮すべきは、経済的効率主義ではなく、御同朋・御同行の聞法生活・サンガを、如何に実現させるかにあるのではないのでしょうか。